

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Comparative Study of Contemporary Aboriginal Whale Hunts in Alaska and Arctic Canada : With a Special Focus on the Inupiat and Inuit Bowhead Whale Hunts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008574

北アメリカの現代先住民捕鯨
に関する比較研究
—アラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットの
ホッキョククジラ猟の比較—

岸 上 伸 啓

北アメリカの現代先住民捕鯨に関する比較研究 —アラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットの ホッキョククジラ鯨の比較—

岸 上 伸 啓

1 はじめに

近年、クジラは環境保護の中心的なシンボルとなっている。しかも、このクジラは、現実には存在しないイメージ上で作り出され、神格化されたクジラである。カランはそれを「スーパーホエール」と呼んでいる¹ (Kalland 1993)。しかし、現実のクジラは、ヒゲクジラ類とハクジラ類に大別でき、亜目のレベルでは85種類に分類されている (笠松・宮下・吉岡 2009 : 6-9)。それらは、全長が25メートルを超すシロナガスクジラから全長1.5メートル程度のネズミイルカまで多様なクジラを含んでいる。

1970年代以降、世界各地で環境保護や動物愛護を目的とした反捕鯨運動が盛んになり、1982年の国際捕鯨委員会 (以下、IWCと略称) の総会において13種類の大型鯨類を対象とした商業捕鯨の一時停止が決定された。以降、現在に至るまで大型鯨類の商業捕鯨は中断中である。2015年7月現在、IWCが承認している大型鯨類の捕獲は、日本の調査捕鯨やノルウェーとアイスランドの商業捕鯨²、ロシアと米国、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国、デンマーク領グリーンランドの先住民生存捕鯨である。これら以外にIWCに加盟していないカナダやインドネシアなどの国々で大型鯨類を捕獲している³。

北アメリカ先住民の捕鯨は、地域によって違いがあるが、ホッキョククジラ、コククジラ、ザトウクジラのような大型鯨類、シロイルカやイッカクのような小型鯨類を捕獲してきた。

本稿の目的は、北アメリカ極北先住民による現代の大型鯨類の捕獲およびそれに関連する諸活動や法制度などを比較検討し、それらの社会における捕鯨の意義や特徴、問題点を解明することであ

る⁴。本稿で比較の主対象とするのはアラスカ先住民、とくにイヌピアット (Inupiat) とカナダ東部極北地域のイヌイット (Inuit) のホッキョククジラ鯨である。また、カナダのヌー・チャ・ヌヒ (Nuu-chah-nulth) と米国のマカー (Makah) のコククジラ鯨とザトウクジラ鯨については、補足的に取り扱う (岸上 2014a ; 浜口 2013)。

なお、ホッキョククジラ (*Balaena mysticetus*) とは、成獣の全長は18メートル以上、体重は75~100トンに達する回遊性のヒゲクジラである (Doniol-Valcroze and Hammill 2013 : 26)。

2 捕鯨に関する歴史的比較

2.1 捕鯨の起源および展開

北アメリカのアラスカ沿岸地域では今からおよそ3400年前からホッキョククジラを利用してきたことが知られているが、寄りクジラの利用ではなく意図的に捕鯨を行なったのかどうかは不明なままである (Savelle 2005)。ベーリング海峡沿岸地域においてクジラの意図的な捕獲は2000年前ごろから散発的に始まり (Stoker and Krupnik 1993)、極北地域が温暖であった紀元後1000年ごろからホッキョククジラを積極的に捕獲し始めた (Savelle 2005)。このアラスカにおける捕鯨文化はウミアック (大型皮舟) を利用した捕鯨活動を中心として組織されていた (Sheehan 1997)。

アラスカで誕生したこの捕鯨文化は、それから300年間のうちにグリーンランドまで到達したが、その文化が伝播していく過程で、それまで各地で栄えていた文化を吸収していった。このカナダ極北地域やグリーンランドにまで広がった文化は「チューレ文化」と呼ばれ、きわめて斉一的な生活様式を特徴としていた。

極北地域が寒冷化し始めると捕鯨活動は衰退し、寒さがピークに達する17～18世紀ごろにはホッキョククジラを食料基盤とする文化から各地で獲れるアザラシやセイウチ、カリブー、ホッキョクイワナなどを食料基盤とする文化へと変化し、各地で多様な地域文化が成立していった。このころにイヌイットは欧米から来た捕鯨者や探検家らと接触を開始することになる。

チューレ文化は地球の温暖化に伴い、東進した。12世紀ごろから18世紀ごろまでサマーセット島のような高度極北地域ではホッキョククジラがイヌイットの生業の基盤となった。それはさらに南下し、ヌナヴィク地域では13世紀以降に捕鯨が重要になった (Francis 2013:18; Lofthouse 2013)。この捕鯨文化はアラスカ地域に端を発するものであり、もともとはウミアックによる捕鯨が行われていたが、1885年ごろのハドソン海峡沿岸でのホッキョククジラはカヤック (小型皮舟) を使って行われていたと報告されている (Saladin d'Anglure 2013:77)。

2.2 北アメリカ極北地域における商業捕鯨の影響

大航海時代以降の欧米社会ではさまざまな種類のクジラの脂肪からとられる鯨油は、ランプの燃料や石鹸の原材料として貴重な資源であった。また、ヒゲクジラ類の髭は、鞭やばね、コルセットの部品の原材料として利用された。このため、バスク、オランダ、英国、米国、ノルウェーの捕鯨者が北大西洋やヨーロッパ側の北極海で商業捕鯨を行なうようになった⁵。その後、漁場は拡大し、カナダの東西の沖合や、極北地域において欧米人による商業捕鯨が行われるようになった。

1530年から1620年ごろまで、カナダ東部ベルアイル海峡周辺およびラブラドル半島の沖合では、バスク人が捕鯨を行なった。1719年から1972年まで英国や米国、その後、カナダの捕鯨者が同海域で捕鯨を行なった。1896年から1972年まではニューファンドランドやノヴァスコシアの沿岸に開設された捕鯨基地から出港し、捕鯨が行なわれた。これらの時期のおもな捕獲対象はセミクジラとホッキョククジラであった (Bronell et. al eds.

1986; Dickinson and Sanger 2005; Proulx 1993; Reeves 1983; Ross 1979)。

グリーンランドとカナダのバフィン島とのあるバフィン湾とデービス海峡では、1719年から1911年まで英国や米国の捕鯨者がホッキョククジラを対象とした商業捕鯨を行なった (Lubbock 1937; Jacob et al, eds. 1984; Reeves 1983; Ross 1979; Ross and McIver 1982)。さらに、ハドソン海峡やハドソン湾では、1860年から1915年まで英国 (おもにスコットランド) の捕鯨船がホッキョククジラの商業捕鯨を行なった (Ross 1975)。

以上のような経緯で1530年ごろから1915年までの間に、カナダの東部極北地域で約5万8千頭から約6万9千頭のホッキョククジラが商業目的に捕獲されたと推定されている (Higdon 2009)。

アラスカ地域における商業捕鯨は、カナダ東部極北地域と比較するとその開始は遅かったといえる。1848年にベーリング海以北でホッキョククジラが発見されると、1849年から1914年にかけて米国の捕鯨船を中心に北西アラスカ沖のチュクチ海やボーフォート海、さらにはカナダ西部極北地域の沖合でホッキョククジラの捕獲が盛んになった。捕鯨会社はアラスカのバローには1884年に、ポイント・ホープには1887年に捕鯨基地を開設した (Bockstoce 1986)。

以上のような経緯で1849年から1914年までの期間にベーリング海やチュクチ海やボーフォート海で捕獲されたホッキョククジラの数約1万6千頭から約1万7千頭と推定されている (Bockstoce et. al 2005:4, 6)。

1790年から1915年にかけてカナダ北西海岸地域の沖合では、米国や英国の捕鯨者、その後は、カナダの捕鯨会社がコククジラやザトウクジラなどを捕獲した。特に1835年ごろから商業捕鯨が盛んになった (Ellis 1991; Webb 1988)。また、1905年から1967年までは西部カナダ捕鯨会社が同地域で操業していた。

アラスカにおいてもカナダ東部極北地域においても商業捕鯨は、20世紀初頭までにホッキョククジラを大量に捕獲し、生息数を激減させたという共通点が認められる。両地域とも欧米から来た捕鯨者が多数のイヌピアットやイヌイットを雇い、

捕鯨やその他の仕事に従事させた。また、捕鯨者との接触により欧米から物資や伝染病、アルコールが先住民社会に流入し、キリスト教の受容とともに、欧米製物資への依存化や人口の減少といった大きな社会変化が発生した。

ホッキョククジラが少なくなったこと、第1次世界大戦が始まったこと、石油の利用などによりクジラ製品の市場が崩壊したことなどがおもな理由で、両地域において1915年ごろに商業捕鯨が終焉を迎えた。商業捕鯨や捕鯨者との交易がなくなった両地域では、イヌピアットやイヌイットは経済的に困窮状態に陥った。アラスカではイヌピアットが食料を得るために捕鯨を細々ながら続けたが、カナダ東部極北地域ではイヌイットはそのような捕鯨を行なわなくなった。

商業捕鯨が北アメリカ極北地域におけるホッキョククジラ、セミクジラ、コククジラの生息頭数を激減させたため、1931年に、国際連盟の枠内でイギリス、ノルウェーなど8カ国がジュネーブ捕鯨条約を締結し、セミクジラの商業捕獲の禁止を決定した。また、1937年にはイギリスやノルウェーなどがロンドン国際捕鯨協定を締結し、コククジラやホッキョククジラの商業的捕獲を禁止した。さらに、1946年には米国ら15カ国が国際捕鯨取締条約(ICRW)を締結した。これを受けて1948年には国際捕鯨委員会(IWC)が成立した。この条約では、ホッキョククジラなど13種類の大型クジラの捕獲を一時的に禁止したが、先住民による地域的な消費を目的とした捕鯨は例外として認められた。

2.3 ランドクレームの締結と捕鯨の活性化・復活

イヌピアットらは、商業捕鯨が終焉を迎えた1915年ごろ以降もホッキョククジラ鯨を続けた。彼らは20世紀初めから1970年ごろまで年平均11頭を獲ってきた。アラスカでは先住民によるランドクレームが決着し、1971年にアラスカ先住民請求処理法(Alaska Native Claims Settlement Acts、略称ANCSA)⁶が成立した。そして1977年からプルドー湾地域での石油生産が始まった。このため政治力と経済力を得たイヌピアットは、捕鯨活動を拡大させた。しかし1970年代にホッキョククジラ

の捕獲頭数やヒットアンドロス数(仕留めたが陸揚げできなかった数)が急増したため、その絶滅を恐れたIWCは、イヌピアットを含むアラスカ先住民による捕鯨を禁止した。これに対し、アラスカ・エスキモー(イヌピアットとユピート)の捕鯨10カ村は、1977年8月にアラスカ・エスキモー捕鯨委員会(Alaskan Eskimo Whaling Commission)を結成し、米国政府とともに捕鯨再開にむけたロビー活動を行った。その結果、IWCは1978年にアラスカ・エスキモーに対して年間12頭の捕獲もしくは18回の鉋打ちを認めた。それ以降、捕獲許可上限数(クオータ)は数度、見直された。現在は、アラスカ先住民とロシア・チュコトカの先住民はあわせて年間56頭(2013年から2018年までの6年間で336頭未満)のホッキョククジラの捕獲が許されている。

一方、カナダ極北地域では1915年ごろから、イヌイットはほとんど捕鯨を行っていない。同地域で捕鯨が再開されたのは、1990年代以降である。西部極北地域のイヌビアルイットが1991年に、ヌナヴトのイヌイットが1996年に、ヌナヴィックのイヌイットが2008年にカナダ政府から許可を得てホッキョククジラ鯨を再開した。この背景にはランドクレームの締結による狩猟・漁撈権の確立がある(岸上 2013)。ケベック州極北地域のイヌイットは1975年に、イヌヴィアルイットは1984年に、中部および東部極北地域のイヌイットは1993年にランドクレームを締結した。これらの協定には先住民の権利として具体的な狩猟・漁撈権が盛り込まれている。

アラスカでは捕鯨が継続して実施されてきた一方、カナダでは約70年の中断ののちに復活している(岸上 2013; Freeman, Wein and Keith 1992)。

3 イヌピアット社会とカナダ・イヌイット社会における捕鯨の法的根拠、現状と問題点

3.1 現状

北アメリカ先住民による伝統的な捕鯨は、アラスカのイヌピアットやユピートによるホッキョククジラ鯨、北西海岸先住民のマカーによるコククジラ鯨、北西海岸先住民のヌー・チャ・ヌヒによるコククジラ鯨およびザトウクジラ鯨、カナダ極

北地域のイヌイトによるホッキョククジラ猟であった。それらの現状は、アラスカ先住民の捕鯨は継続、カナダ・イヌイトの捕鯨は復活、マカーの捕鯨は一度復活したが、停止中（浜口 2013）、ヌー・チャ・ヌヒの捕鯨は停止中（岸上 2014）である。

3.2 イヌピアットとイヌイトの捕鯨活動の法的根拠

捕鯨については国際的な取り決めと国内法が問題となる。

すでに紹介したように、国際捕鯨取締条約（ICRW）では、先住民による地域的な消費を目的とした捕鯨は例外として認められた。この取り決めに基づき、国際捕鯨委員会（IWC）では、先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling）を認めており、イヌピアットやユピートの捕鯨はそのひとつである。一方、米国内で彼らがホッキョククジラを捕獲することができる法的根拠は、ランドクレームや条約で決められた先住権に由来するものではなく、国内法である⁷。米国の「海洋哺乳類保護法（Marine Mammal Protection Act of 1972）」や「絶滅の危機に瀕した種の保護法（Endangered Species Act of 1973）」ではイヌピアットやユピートらの先住民には、特定の条件のもとで「先住民適用除外項」が適用されている。

「海洋哺乳類保護法」では、アラスカ地域の先住民は、無駄なく利用するという条件のもと、生業目的の海洋性哺乳類の捕獲や、伝統的な工芸品や衣類の製作や販売を目的とする捕鯨規則に則った捕獲は例外として認められている。また、先住民村落内での可食部位の販売も認められている。

「絶滅の危機に瀕した種の保護法」では、先住民を含むアラスカ州住民の生業目的での捕獲も例外として認められている。また、先住民村落内での可食部位の販売も認められている（久保田 2009：38）。米国では、1855年のニアベイ条約（Neah Bay Treaty）の中に捕鯨を盛り込んだマカーを例外とすれば、いかなる政府とも条約を結んでいなかったアラスカ先住民の法的根拠はこの国内法のみである。従って、国内法が変更されれば、先住民は捕鯨の法的根拠を失う可能性がある。

一方、カナダは1970年代末には商業捕鯨を行わなくなったため、1982年にIWCを脱退した。また、イヌイトらの主張を聞き入れ、IWCへの再加入はしなかった。このため、イヌイトの捕鯨はIWCの先住民生存捕鯨ではない。したがってイヌイトの捕鯨を保証する法的根拠は国内法によるしかない。カナダ・イヌイトはかつていかなる政府とも条約を結んだことはなく、すでに述べたように1970年代半ば以降、地域ごとにランドクレーム協定を結び、彼らの権利を確定し、その後、交渉によって権利の内容を修正してきた⁸。カナダ・イヌイトのランドクレーム協定に共通しているのは、彼らの狩猟・漁撈権を重視し、協定の中心に据えている点である。その中には、ホッキョククジラやシロイルカ、イッカクなどの鯨類をとる権利も盛り込まれていた。さらに、カナダでは1982年に制定された憲法第2章第35条によって、先住民族とは「インディアン」、「イヌイト」および「メイティ」であると規定され、先住民族の権利は同憲法第1章第25条で保障されることになった。また、国内法である海獣規則（the Marine Mammal Regulation）の法的規制のもとにある。従って、ある頭数を捕獲してもクジラの生息数が再生産可能である限り、イヌイトの捕鯨は憲法で保証されていることになる。

イヌピアットとイヌイトの捕鯨の法的根拠を比較すると、前者は国内法の例外条項、後者はランドクレーム協定と憲法、国内法に基づくという大きな違いがある。一方、イヌピアットはIWCの先住民生存捕鯨の規則に従っているが、イヌイトにはIWCの先住民生存捕鯨の規則は適用されないという違いが存在している。

3.3 イヌピアットとイヌイトの捕鯨活動の現状

イヌピアットの捕鯨の歴史は1000年以上にもなる。たとえば、アラスカ州ノーススロープ郡バローでは、現在でも春季と秋季に捕鯨が行われ、それに関連する祝宴や祭りが実施されている。4月下旬から5月中旬にかけて春季捕鯨が実施される。ホッキョククジラを捕獲した捕鯨キャプテンは、捕鯨の翌日に自宅で祝宴を開催する。その後、

5月下旬から6月上旬にはウミアックの陸揚げの儀式であるアプガウティ、6月下旬には大規模なナルカタックが実施される。夏にはアザラシやセイウチを捕獲し、ウミアック用の皮を確保する。9月に入ると秋季捕鯨の準備を始め、9月下旬から10月中旬にかけて沖合でモーターボートを利用して捕鯨を行う。捕鯨に成功した捕鯨キャプテンは自宅で祝宴を開催するほか、11月の感謝祭や12月のクリスマスでの祝宴のために村内にある教会に鯨肉やマツタックを提供する。年が明け、2月ごろからウミアックの手入れや貯蔵穴の掃除をはじめ、4月に入るとバローから捕鯨キャンプまでのトレイルづくりを行う。このように、彼らは1年中、捕鯨に関連する何らかの活動を行っている。また、捕獲したホッキョククジラの肉やマツタック、舌、内臓は捕鯨者の間で分配された後、祝宴の時に村人に分配される。さらに、祝宴の後、多数の村人が集まってドラムダンスが行われる。捕鯨、その後の祝宴や分配、ドラムダンスは、イヌピアットのアイデンティティや世界観を維持させる上で重要な働きをしている。捕鯨とそれに関する活動は、現在でも彼らの生活の中核をなしている (Kishigami 2013b)。

カナダでは、北西準州のイヌヴィアルイットが1991年、ヌナヴト準州のイヌイットが1996年、ケベック州北部（ヌナヴィク）のイヌイットが2008年に、長い間、中断していたホッキョククジラ鯨を再開した⁹。2008年時点で東部極北地域系統のホッキョククジラは約14,400頭と推定され、1年あたり18頭を捕獲しても個体数維持の上では問題がないと報告されている (DFO 2008)。この生物学的調査結果に基づき、2008年にはカナダ政府漁業海洋省(略称DFO)はイヌイットが毎年4頭程度、捕獲しても問題はないという判断を下した。その後、2013年にクジラの生息頭数調査を実施した結果は、約7000頭であると推定された。一連の生物学的調査に基づき、DFOは2015年にクオータを変更し、1年あたりヌナヴト準州に5頭、ヌナヴィクに2頭の捕獲を許可している。

地域にもよるが、カナダでは50年から70年以上にわたりイヌイットによる捕鯨が中断されていたので、その復活は、新しい伝統を作り出すような

ものであった。ヌナヴィクの場合、ホッキョククジラが捕れるのは、ハドソン海峡に近いウングア湾の2つのコミュニティ、カンギックスジュアック(Kangiqsujaq)とクアタック(Quartaq)である。2008年の前者における捕鯨では、村議会と村の狩猟者協会がキャプテンとハンターを選抜し、村を代表して捕鯨を行った。ヌナヴトの先住民団体(Nunavut Tunngavik Incorporated、略称NTI)の協力の下、ハンターは研修を受け、狩猟の技量を習得した。クジラは解体された後、村人に分配された以外にもヌナヴィクの村々に分配された(Saladin d'Anglure 2013)。ヌナヴィック・イヌイットの場合、狩猟や解体の技術や方法、ホッキョククジラについての知識などはほとんど失われていたので、捕鯨の復活というよりも新しい捕鯨伝統の創出に近いものであった¹⁰。現時点では捕鯨は生活に根付いているとはいいがたいが、捕鯨を行い、成果物を分配し、食べることにより、イヌイットのアイデンティティを再確認し、高揚させることができる。

イヌピアットとイヌイットの捕鯨を比較した場合、前者の捕鯨は複合的な文化システムを形成しているのに対し、後者の捕鯨はこれから文化を再構築していく途上にあるといえる。しかし、両者の場合とも捕鯨はアイデンティティの確認や維持においては大きな効果を持っているといえる。

3.4 直面する問題点

北アメリカ極北地域に住むイヌピアットもカナダ・イヌイットもグローバル化した世界に住んでいる。捕鯨に関連して共通の問題や特異な問題に直面している。

第1の共通問題は、生業として捕鯨を行うことは、操業経費が必要であり、資金の獲得が大きな問題である。両者とも獲物を売らないという伝統を保持している。バローのイヌピアットの捕鯨キャプテンは、家族の賃金収入や先住民団体からの配当金等を利用して捕鯨の資金に充てているが、ブルドー湾の石油・天然ガス開発が衰退すれば、現金収入が減る可能性がある。ヌナヴィクのイヌイットは、先住民団体マキヴィクの支援、村の役場や狩猟・漁撈・ワナ猟者協会の支援を受け、捕

鯨に従事している。捕鯨など狩猟漁撈活動に従事するイヌピアットやイヌイットにとって現金はそれを行なうための手段であり、お金をもうけることは目的ではない(Wenzel 2013: 190)。捕鯨を行うための資金の確保は大きな問題である¹⁾。

第2の共通問題は、温暖化の影響である。温暖化が鯨類や自然環境に影響を与え、捕鯨が困難になる場合が起こっている。さらに温暖化によって近海の実地油田・天然ガスの採掘や北西航路を利用した船舶の増加、流出油発生の可能性など、ホッキョククジラや捕鯨活動に影響を与えるさまざまな要因が発生している(Kishigami 2010)。

第3の共通問題は、環境保護団体や動物福祉団体により世界的に繰り広げられている反捕鯨運動の影響である。これらのNGOによる運動は、各国政府や各国の世論を動かしつつある。多くのNGOは先住民による捕鯨には、維持可能な捕鯨である限り、容認する姿勢を見せているが、カナダ海洋環境保護協会(The Canadian Marine Environment Protection Society)やシーシェパード(Sea Shepard)のように先住民の捕鯨にも反対する団体も存在している(Saladin d' Anglure 2013: 77)。グローバル化した反捕鯨運動は、人とクジラの関係やクジラ観を変えつつあるといえよう。

第4の共通問題は、資源管理である。ホッキョククジラのように長距離を季節移動し、グローバル・コモンズと見なされうるような動物をどのように持続可能なやり方で管理するかは重要な課題である。本来、IWCは捕鯨を行うために鯨類資源を管理することを目的とする団体であるが、機能不全を起こしているという問題を抱えている(岩崎 2005;大曲 2003)。

以上は、共通の問題であるが、カナダ・イヌイットの場合には、すでに指摘したように、捕鯨や解体の技術や方法、クジラについての知識、分配のやり方などを再習得する必要があるといえよう。

4 現代の先住民社会における捕鯨の重要性

4.1 食料資源としてのホッキョククジラ

一頭のホッキョククジラは、大量の肉やマツタック(脂皮部)など食料資源をもたらす。それらは単に食料となるのではなく、多くの人びとの間

で分配され、祝宴などが催される。従って、捕鯨がもたらす恵みは、食料資源としてだけでなく、アイデンティティや喜びをもたらす源泉となる(岸上 2012; Kishigami 2013a, 2013b)。さらに、店舗で販売されている南から運ばれてきた加工肉と比べると、栄養価に富んでおり、人びとの健康増進に役立つ(Raymonds, III, J. E. et al 2006)。したがって、北アメリカ極北先住民にとってホッキョククジラは食料資源として重要である。

4.2 社会的資源およびその他の資源としてのホッキョククジラ

ホッキョククジラの肉やマツタックは、伝統的に販売することができないので、経済的な利益を捕鯨者にもたらすことはないが、家族間や親族間、友人間、村落間で分配や交換されている。この分配や交換は特定の人びとの間で社会関係を確認させる効果や生み出す効果、維持させる効果がある。したがって、ホッキョククジラの肉やマツタックは、食料資源のみならず社会的資源でもある(岸上 2012; Kishigami 2013a, 2013b)。また、ホッキョククジラの骨やヒゲなどは工芸品の素材となる。工芸品は観光アート品として販売され、イヌイットやイヌピアットのアーティストの収入源となっている。

4.3 ホッキョククジラ猟に関連する社会・文化活動

イヌピアットの捕鯨は、ハンターや捕鯨キャプテンに狩猟者としての誇りやアイデンティティの基盤のひとつとなっている。また、ホッキョククジラの捕獲に成功した捕鯨キャプテンやハンターは、大量の肉やマツタックを祝宴やお祭りなどさまざまな機会に村人に提供するが、村人はそのような人たちに尊敬や感謝の念を抱き、威信を付与している。

一度、捕鯨という文化的伝統が途絶えたカナダ・イヌイットの間では、捕鯨に関連する世界観や祭りなどはかなり消失しているが、完全に喪失されているわけではない(Laugrand and Oosten 2013; Saladin d' Anglure 2013)。一方、イヌピアットの間では、世界観や共食、ブランケット・トス、

ドラムダンスが息づいており、捕鯨の成功を通してそれらは維持、再生産されている。捕鯨の実施は、関連行事の開催とともに、伝統的な世界観や知識の復活や維持と深く関わっている。

カナダ・イヌイットの間では、捕鯨を行い、鯨肉を分配し、共食することを通して(Laugrand and Oosten 2013; Saladin d' Anglure 2013)、イヌピアットの間では捕鯨や分配、共食に加えて、ブランケ

ット・トスやドラムダンスを行うことによって、人びとのアイデンティティが生み出され、維持されている。捕鯨およびそれに関連する諸活動は、ハンターとしてのみならず、イヌイットやイヌピアットとしてのアイデンティティを創出し、維持させる効果がある(Ikuta 2004; Kishigami 2012, 2013a, 2013b; Sakakibara 2009, 2010)。

	アラスカ(イヌピアット)の捕鯨	カナダ・イヌイットの捕鯨
歴史的継続性	連続性あり	50年以上の中断あり
現在の狩猟方法(猟期)	伝統的な大型皮舟ウミアック(春季)とモーターボート(秋季)の使用 19世紀後半にヤンキー捕鯨から導入した爆発銃とショルダーガンの使用	モーターボート(夏季)の使用 ライフルなど現代的な技術の利用
捕鯨の法的根拠	国内法の例外条項	カナダ憲法、ランドクレーム協定と海獣規則
国際的な規制	IWCの取り決めの適用	IWCに関係なし
現状	捕鯨が生活に根付いている	新しい捕鯨文化の創出
捕鯨の社会的効果	アイデンティティの確認や維持	同左
問題点	操業のための必要経費の捻出 温暖化による諸影響の発生 反捕鯨運動の諸影響	同左

表1 イヌピアットとカナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨の比較

5 検討と結論

本論文ではイヌピアットとカナダ・イヌイットの現在の捕鯨を比較した。その結果、グローバル化した現代社会で生活を営んでいるイヌピアットやイヌイットにとって捕鯨とそれに関連する分配、共食などは文化・社会的など多面的に重要なことが分かった。また、彼らが持続可能な捕鯨を行うためには、適切な資源管理、反捕鯨運動に対抗するための先住民捕鯨に関する国際理解の促進、地球の温暖化に由来する経済活動の管理、捕鯨を実施するための操業費用の確保が重要な課題となる(岸上 2014: 127-130)。この中で、最後の問題は「生業(subsistence)」をどう捉えるかに深く関わっている¹²。

イヌピアットもカナダ・イヌイットも獲物を販売せず、無償で分配するという伝統を保持してい

る一方で、欧米人は先住民が獲物を販売することは非伝統的であり、伝統的な生業ではないと考える傾向が強く認められる。このため、とくに欧米人は生業捕鯨に必要な食料を伝統的なやり方でクジラをとることであると限定的に考える傾向が強い。すなわち、クジラの肉やマツタックを金銭で売買すれば、それはもはや生業捕鯨でないと考えている。しかし、現在、捕鯨を実施するためには、少なからぬ操業費用の捻出が不可欠である。この問題を解決しない限りは、将来、捕鯨の継続は困難になる。

1960年ごろから1980年はじめごろまでカナダ・イヌイットは、アザラシを獲り、その肉や脂肪を食料としながら、その毛皮を販売し、それで得た現金収入を狩猟活動に投入することによって持続可能な生業システムを構築し、維持させた

(Wenzel 1991)。また、グリーンランドでは、デンマークによる2世紀以上に及ぶ植民地体制のもとで獲物を販売もするし、分配もするという新しい伝統を創りあげてきた(Maruardt and Caulfield 1996)。今や北アメリカ極北先住民は、現金を生業活動のための資源として利用しており、現金は生業システムの一部を構成している(Fienup-Riordan 1983; Langdon 1991; Wenzel 2013; Wolfe and Ellanna 1983)。筆者は、社会が時代とともに変わるように、生業の考え方も時代とともに社会の要請に合致するように変化すべきだと考える。

カナダのヌナヴト協定とヌナヴィック協定では、「生業」という言葉は使用せずに、協定の受益者であるイヌイットに「経済的、文化的、社会的利益(Economic, Cultural and Social Interests)」をもたらすための収獲と表現し、特定の海獣や陸獣、魚類を捕獲する権利やイヌイット間で一定の条件下で現地産の肉や魚を売買する権利を認めている¹³。ただし、現時点ではホッキョククジラの肉やマツタケの売買はイヌイットの間ではいまだに行われていない。一方、米国の国内法は鯨肉などの村内における消費目的の売買しか認めていないし、イヌピアット自身も売買していない。

筆者はあえて、北アメリカ極北地域における伝統的生業と獲物の販売が相矛盾するという見解の根拠はどこにあるのかという疑問を提起したい。生業の根幹が生活の再生産(生計の維持)であるならば、過去半世紀のカナダ・イヌイットの歴史を見る限り、生業に現金による販売という要素を加えても、そのことによって社会(関係)が急激に変容する問題は発生しないないと思う。捕鯨の成果物の一部を地域内や地域間で実費もしくは廉価で販売することによって、操業費を捻出させるとともに鯨肉を社会に広くいきわたらせる、持続可能な捕鯨システムを作り出すべきだと考える。そのためには、現代の狩猟採集社会の持続可能な捕鯨の維持と実践に寄与するように、生業概念を再検討し、カナダ・イヌイットのランドクレーム協定で権利が明確化されているように、IWCや村落内のみでの売買が認められている米国における捕鯨に関連する法制度をグローバル化した現状に合致させるために整備することが必要であると考

える。

現代のイヌピアットもイヌイットも彼らの大半は狩猟や漁撈で得た獲物を現金で売買することには抵抗感を持っている。とくに長老たちは金銭による売買は道徳に反するとして強固に反対している。しかし、彼らはグローバル化した経済システムの中で生活し、現金無しに狩猟・漁撈活動も実施できないという状況にある。筆者は、この問題を解決するためには、カナダ・ヌナヴィック地域で1980年代はじめに考案され、30年あまりにわたって実施されてきたハンター・サポート・プログラム(岸上 1998; Gombay 2005, 2009; Kishigami 2000)のような制度を作り、利用することを提案したい。このプログラムは現金経済と生業経済のハイブリッドである。ジェームス湾・北ケベック(ランドクレーム)協定に基づいて州政府が提供する公金を利用して、各村はハンターから肉や魚を買い取り、それらを必要とする村人に無償で提供している¹⁴。この制度はヌナヴィックではほぼ30年の歴史がある。この制度のように村もしくは地方政府が捕鯨者から一定量の鯨肉などを公金で買い取り、必要な住民に無償で提供してはどうであろうか。捕鯨者は現金を得ることができ、それを利用して捕鯨を続けることができる。一方、村人は鯨肉などを無償で手に入れることができる。ヌナヴト準州にも同種のプログラムが存在している。カナダでは、捕鯨の復活のためにはこのプログラムを活用することが一案である。アラスカではこのような制度自体を新たに構築することが必要であると思う。

捕鯨活動を存続させるためのハンター・サポート・プログラムの改善と応用については、今後の研究課題としたい。

(記)

本研究は、2015年8月3日から8月22日にかけてカナダで実施された科研調査「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克—」(代表者:岸上伸啓、課題番号15H02617)の成果の一部である。また、本稿の一部を2015年9月に開催された第11回狩猟採集社会国際会議(CHAGS 11)のセッション42 “Aboriginal Whaling and Identity in the Twenty-

First Century”で報告した。草稿に対し、国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵さんからコメントを頂戴した。記して感謝の微意を表す次第である。

- 1 森田勝昭は、メディアホエール論を展開している。森田によるとメディアホエールとはメディアの圧倒的な物量作戦によって生み出された虚像であるが、人びとの心の中に定着すると、神のような存在になり、環境運動のシンボルとして利用されているという(森田 1994: 391)。
- 2 ノルウェーとアイスランドはIWCの商業捕鯨の一時停止の決定に同意せず、留保の立場をとり、小規模ながら商業捕鯨を継続している。
- 3 近年の捕鯨に関する研究動向については、Savelle and Kishigami (2013)を参照されたい。また、世界各地の捕鯨の歴史や現状については、岸上編(2012)やKishigami, Hamaguchi and Savelle eds. (2013)をお読み頂きたい。
- 4 浜口は、先住民生存捕鯨に関する通文化的研究を発表している(浜口 2012; Hamaguchi 2013)。
- 5 バスク人の捕鯨者はフランスやスペインの捕鯨船に乗り込んでいた。
- 6 この法律の成立によって、アラスカ州の総面積の約10%に相当する16万平方キロメートルの土地の所有権と約9億6250万ドルの補償金がアラスカ先住民に付与された。その一方で、彼らは狩猟・漁撈権を放棄することになった(Burch 1979: 21)。
- 7 ホッキョククジラは公海を回遊し、かつ海上で捕獲されるため、その管轄はアラスカ州政府ではなく、連邦政府である。このため、アラスカ州内における狩猟や漁撈についてはアラスカ州憲法やアラスカ狩猟法(Alaska Game Law of 1902)やその改定版の新アラスカ狩猟法(New Alaska Game Law of 1925)、ホワイト法(White Act of 1924)などがあるが、本稿では取り上げない。また、州内の国有地における生業活動に関わる法律としてアラスカ国有地保全法(Alaska National Interest Land Conservation Act of 1980、略称ANILCA)があるが、捕鯨には直接関係しないので、本稿では取り扱わない。これらの法律

については、Case and Voluck (2002)や久保田 (2009: 26-29, 33-359)を参照されたい。

- 8 ヌナウト協定(1993)およびヌナヴィク協定(2008)の第5条に捕鯨を含む海獣狩猟に関する権利が記載されている。
- 9 イヌヴィアルウットの捕鯨の復活については、Freeman, Wein and Keith (1992)を参照されたい。
- 10 現役のハンターや彼らの父親の世代のハンターは、ホッキョククジラ鯨を行なったことはなかったが、クジラやクジラ鯨に関する話を先行世代から受け継いでいる(Saladin d'Anglure 2013; Laugrand and Oosten 2013)。したがってクジラや捕鯨に関する知識が完全に喪失したわけではなかった。
- 11 商業捕鯨では、捕獲したクジラを売ることによって、現金を獲得し、その一部を操業費にまわすことができるが、生業捕鯨では捕獲したクジラを売ることができない(もしくは売らない)ため、現金を獲得できない。捕鯨を行なうために必要な経費は、別途、調達する必要がある。
- 12 文化人類学における生業概念については、岸上(2008)、スチュアート(1996)、本多(2005)、Kishigami (2013c)、Stern (2000)やWenzel (1991, 2013)などを参照されたい。また、アラスカ州における「生業」の法的概念については久保田(2009)を参照されたい。
- 13 ヌナヴィクのアクリヴィク村やプヴィルニツク村ではハンター・サポート・プログラムを利用し、ハンターからカリブーやホッキョクイワナを買い取り、食料の必要な村民に無償で提供している(Kishigami 2000; Gombay 2005)。
- 14 この制度の問題点のひとつは、年間予算に限度があることである。

参考文献

(和文)

岩崎・グッドマンまさみ

2005 『人間と環境と文化—クジラを軸にした一考察—』東京：清水弘文堂書房。

大曲佳世

2003 「鯨類資源の利用と管理をめぐる国際的対立」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館研究報告 46) Pp.419-452, 大阪:国立民族学博物館。

笠松不二男・宮下富夫・吉岡基

2009 『新版 鯨とイルカのフィールドガイド』東京:東京大学出版会。

岸上伸啓

1998 「ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化」『人文論究』66: 27-41。

2008 「文化人類学的生業論—極北地域の先住民による狩猟漁労採集活動を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 329-578。

2012 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2): 147-179。

2013 「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権」『カナダ研究年報』33: 1-16。

2014a 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチヤヌルスの捕鯨と先住権」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23: 23-34。

2014b 『クジラとともに生きる—アラスカ先住民の現在』京都:臨川書店。

岸上伸啓編

2012 『捕鯨の文化人類学』東京:成山堂書店。

久保田亮

2009 「法概念『サブシステム』の成立—先住民権利保障へのドミナント文化の影響—」『東北人類学論壇』8: 22-53。

スチュアートヘンリ(本多俊和)

1996 「現代の狩猟採集民にとっての生業活動の維持—民族と民族学者の自己提示言説をめぐって」スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在—生業文化の変容と再生』Pp.125-154, 東京:言叢社。

浜口尚

2012 「先住民生存捕鯨再考」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』Pp. 45-63, 東京:成山堂書店。

2013 「サンダーバードは再びマカーの地に舞い降りるのか?: マカー捕鯨の歴史、現状および

課題」『園田学園女子大学論文集』47: 155-176。

本多俊和(スチュアートヘンリ)

2005 「民族文化としての採集狩猟活動—イヌイトの事例から」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭編『文化人類学研究—先住民の世界』Pp. 81-96, 東京:放送大学教育振興会。

(欧文)

Bockstoce, John R.

1986 Whales, Ice and Men: The History of Whaling in the Western Arctic. Seattle: University of Washington Press.

Bockstoce, John R., et al.

2005 The Geographic Distribution of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, in the Bering, Chukchi, and Beaufort Seas: Evidence from Whaling Record, 1849-1914. Marine Fisheries Review 67(3): 1-43.

Bronwell, Robert L. et al., eds

1986 Right Whales: Past and Present Status. IWC Special Issue. No.10.

Dickinson, Anthony B. and Chesley W. Sanger

2005 Twentieth-Century Shore-Station Whaling in Newfoundland and Labrador. Montreal: McGill-Queen's University Press.

Burch, Ernest S. Jr.

1979 Native Claims in Alaska: An Overview. Études/Inuit/Studies 3(1): 7-30.

Case, David S. and David A. Voluck

2002 Alaska Natives and American Law. Fairbanks: University of Alaska Press.

Department of Fisheries and Oceans Canada

2008 Assessment of Eastern Arctic Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) (Science Advisory Report 2007/053). Ottawa: Canadian Science Advisory Secretariat.

2009 Advice on Selective Hunting of Eastern Canadian Arctic – West Greenland Bowhead Whales (Science Advisory Report 2008/057). Ottawa: Canadian Science Advisory Secretariat.

Dickinson, A.B. and C.W. Sanger

2005 Twentieth-Century Shore-Station Whaling in

- Newfoundland and Labrador. Montreal and Kingston: McGill-Queen's Press.
- Doniol-Valcroze, Thomas and Mike Hammill
2013 Ecology of Bowhead Whales: A Summary of Knowledge and Recent Findings. In *Arvik!*: In Pursuit of the Bowhead Whale. Robert Fréchette ed. Pp.25-39. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- Ellis, Richard
1991 *Men and Whales*. New York: A.A. Knopf.
- Fréchette, Robert ed.
2013 *Arvik!*: In Pursuit of the Bowhead Whale. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- Freeman, Milton M. R.
2005 'Just One More Time before I Die': Securing the Relationships between Inuit and Whales in the Arctic Regions. In *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No.67). Nobuhiro Kishigami and James M. Savelle eds. Pp.59-76. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Freeman, Milton M.R., Eleanor E. Wein, and Darren Keith
1992 *Recovering Rights: Bowhead Whales and Inuvialuit Subsistence in the Western Canadian Arctic* (Occasional Publication No.31). Edmonton: Canadian Circumpolar Institute and Fisheries Joint Management Committee.
- Gombay, Nicole
2005 *The Commoditization of Country Foods in Nunavik: A Comparative Assessment of Its Development, Applications, and Significance*. *Arctic* 58 (2): 115-128.
2009 *Sharing or Commoditising? A Discussion of Some of the Socio-economic Implications of Nunavik's Hunter Support Program*. *Polar Record* 45(233): 119-132.
- Goodman, Dan
1997 *Land Claim Agreements and the Management of Whaling in the Canadian Arctic*. In *Proceedings of the 11th International Abashiri Symposium: Development and Northern Peoples*. Hokkaido Museum of Northern Peoples ed. Pp.39-50.
- Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- Hamaguchi, Hisashi
2013 *Aboriginal Subsistence Whaling Revisited*. In *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies No.84). Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi, and James M. Savelle eds. Pp. 81-99. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Higdon, Jeff
2009 *Commercial and Subsistence Harvests of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) in Eastern Canada and West Greenland* (Research Document 2008/008). Ottawa: Canadian Science Advisory Secretariat.
- Høgh, Helle
2000 *Bowhead Whale Hunting in Nunavut: A Symbol of Self-Government*. In *Nunavut: Inuit Region Control of Their Lands and Their Lives*. Jens Dahl, Jack Hicks, and Peter Jull, eds. Pp.196-204. Copenhagen: International Work Group for Indigenous Affairs.
- Ikuta, Hiroko
2004 "We Dance Because We Are Inupiaq", Inupiaq Dance in Barrow: Performance and Identity. MA Thesis, Department of Anthropology, University of Alaska, Fairbanks.
- Kalland, Arne
1993 *Management by Totemization: Whale Symbolism and the Anti-Whaling Campaign*. *Arctic* 46(2): 124-133.
- Kishigami, Nobuhiro
2000 *Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada*. In *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53). G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami eds. Pp.171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
2010 *Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska*. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.

- 2013a Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. *In* Anthropological Studies of Whaling (Senri Ethnological Studies No.84). Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi, and James M. Savelle eds. Pp.101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013b (Research Report) Sharing and Distribution of Whale Meat and Other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA. Osaka: Kishigami's Office, National Museum of Ethnology.
- 2013c What Is a Subsistence Activity?: With a Special Focus on Beluga Whale Hunt by Inuit in Arctic Canada. *Jinbun-ronkyu* 82: 79-90
- Kishigami, Nobuhiro, Hisashi Hamaguchi and James M. Savelle eds.
2013 Anthropological Studies of Whaling (Senri Ethnological Studies No.84). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Langdon, Stephen J.
1991 The Integration of Cash and Subsistence in Southwest Alaska Yup'ik Eskimo Communities. *In* Cash, Commoditisation and Changing Foragers (Senri Ethnological Studies No.30). Nicolas Peterson and Toshio Matsuyama eds. Pp.269-291. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Laugrand, Frédéric B. and Jarich G. Oosten
2013 "We're Back with Our Ancestors": Inuit Bowhead Whaling in the Canadian Eastern Arctic. *In* Arvik!: In Pursuit of the Bowhead Whale. Robert Fréchette ed. Pp.83-95. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- Lofthouse, Susan
2013 Pre-Contact and Contact Period Bowhead Whale Hunting in the Eastern Canadian Arctic. *In* Arvik!: In Pursuit of the Bowhead Whale. Robert Fréchette ed. Pp.40-57. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- Lubbock, Basil
1937 The Arctic Whalers. Glasgow: Brown, Son and Ferguson.
- Marquardt, O. and R. Caulfield
1996 Development of West Greenlandic Markets for Country Food since the 18th Century. *Arctic* 49 (2): 107-119.
- Proulx, Jean-Pierre
1993 Basque Whalers in Labrador in the 16th Century (Studies in Archaeology, Architecture and History). Ottawa: Parks Service, Environment Canada.
- Raymonds III, J. E. et al
2006 Human Health Implication of Omega-3 and Omega-6 Fatty Acids in Blubber of the Bowhead Whale (*Balaena mysticetus*). *Arctic* 59(2): 155-164.
- Reeves, Randall R.
1983 Distribution and Migration of the Bowhead Whale: Eastern North American Arctic. *Arctic* 36 (2): 5-64.
- Ross, William G.
1975 Whaling and Eskimos: Hudson Bay 1860-1915 (Publications in Ethnology No.10). Ottawa: National Museums of Canada.
1979 The Annual Catch of Greenland (Bowhead) Whales in Waters North of Canada, 1719-1915. *Arctic* 32(2): 91-121.
- Ross, William G. and Alexander McIver
1982 Distribution of the Kills of Bowhead Whales and Other Sea Mammals by Davis Strait Whalers, 1820-1910. Calgary: Arctic Pilot Project.
- Saladin d'Anglure, Bernard
2013 Bowhead Whale Hunting among the Inuit of Canada's Arctic: Thirty Years of Challenges (1978-2008). *In* Arvik!: In Pursuit of the Bowhead Whale. Robert Fréchette ed. pp.59-81. Westmount, QC: Nunavik Publications.
- Sakakibara, Chie
2009 'No Whale, No Music': Inupiaq Drumming and Global Warming. *Polar Record* 45(235): 289-303.
2010 *Kiavallakkikput* Agviq (Into the Whaling Cycle): Cetaceousness and Climate Change among the Inupiat of Arctic Alaska. *Annals of the Association of American Geographers* 100(4): 1003-

1012.

Savelle, James Michael

2005 The Development of Indigenous Whaling: Prehistoric and Historic Contexts. *In* Indigenous Use and Management of Marine Resources (Senri Ethnological Studies No.67), Nobuhiro Kishigami and James Michael Savelle eds. Pp. 53-55. Osaka: National Museum of Ethnology.

Savelle, James M. and Nobuhiro Kishigami

2013 Anthropological Research on Whaling: Prehistoric, Historic and Current Contexts. *In* Anthropological Studies of Whaling (Senri Ethnological Studies No.84), Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi, and James M. Savelle eds. Pp. 1-48. Osaka: National Museum of Ethnology.

Sheehan, Glenn W.

1997 In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society. Alaska: Alaska Anthropological Society.

S' Jacob, Hugo K. et al., eds.

1984 Arctic Whaling. Groningen: Arctic Centre, University of Groningen.

Statistics Canada

2013 Aboriginal Peoples in Canada: First Nations People, Métis and Inuit (Catalogue No. 99011-X2011001). Ottawa: Ministry of Industry.

Stern, Pamela

2000 Subsistence: Work and Leisure. *Études/Inuit/Studies* 24(1): 9-24.

Stoker, S. and I. I. Krupnik

1993 Subsistence Whaling. *In* The Bowhead Whale. J. J. Burns, J. J. Montague, and C. J. Cowles eds. Pp. 579-629. Lawrence, Kan: The Society for Marine Mammalogy.

Webb, Robert Lloyd

1988 Commercial Whaling in the Pacific Northwest 1790-1967. Vancouver: University of British Columbia Press.

Wenzel, George

1991 Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic. Toronto: University of Toronto Press.

2013 Inuit and Modern Hunter-Gatherer

Subsistence. *Études/Inuit/Studies* 37(2): 181-200.

Wolfe, Robert J. and Linda J. Ellenna

1983 Resource Use and Socioeconomic System: Case Studies of Fishing and Hunting in Alaska Community (Alaska Department of Fish and Game Technical Paper 61). Anchorage: Division of Subsistence, Alaska Department of Fish and Game.

(国立民族学博物館)